生活の工夫カード (35)

親ががんになったことを、未成年の子どもにどのように伝え、支えるか②

年齢	病気や病状の理解　※個人差があります	伝えることで予想される反応および お子さんへのサポート
乳児期 （0～2歳）	理解は困難ですが、親の不安な気持ちを感じとります。	【反応】眠りが浅い、食べない、泣くなどで不安を表現をする。年齢より幼く振舞い、甘える様子を見せる。 【対応】 ・養育者からのスキンシップをだいじに、愛情を伝える。 ・不安や気がかりの表現に対して「心配してくれてありがとう」と肯定する。その上で、「風邪とは違う病気である」「誰かのせいでなる病気ではない」「（子どもの）世話をしてくれる人がいる」ことを伝える。
幼児期 （～5歳）	親の身に起こった病気の原因を自分だと捉えることがあります。また、自分の生活パターンの変化を気にして、繰り返し同じ質問をすることがあります。 例：「病気はわたしのせい？いい子でいたら治る？」 「保育園お休みするの？誰が一緒に寝てくれるの？」	
学童期 （～12歳）	理解や行動のし方は個別的ですが、低学年でも病気、治療、副作用について、見える変化（現実）と親から聞く内容（認識）との整合性を保たれると、年齢に応じた理解が促進されます。 例：「なんで元気に見えるのに、病院に行くのか…」 「学校に行っている間に死んじゃうのでは…」	【反応】周囲の変化に敏感であるため、「通院はいつまでか」「一緒に○○できるようになるか」など、不安を言葉にする。 【対応】 ・一度に全てを伝えず、わかっている事実（現状）を具体的に伝える。返答に迷うことは、動揺したまま返答しないで「今度、返事する」と約束する。 ・「治したい（一緒に○○したい）と思って治療している」思いや愛情を伝える。
思春期 （12歳～）	病気や病状を理解できますが、親より同年代の関わりや活動を通して自我を形成するプロセスにあるため、大人に頼らない様子を見せることがあります。	【反応】親の病気について、何も気にしていないような様子や、同年代の仲間との活動を優先して過ごすような姿に見える。 【対応】 ・親の側が知っていて欲しい現状（変化）を伝える場合、子どもの側にも何か聞きたいことの有無、病院に一緒に行くか行かないか等の意思や行動の選択肢も伝える。